

廖 嘉祈

(東京大学大学院)

「「封建世界」における党争の捉え方—水戸学者・会沢正志斎や藤田東湖を中心に—」

本発表は、漢・唐以来の中国で繰り返し発生してきた党争の歴史を、水戸学者・会沢正志斎（1782～1863）や藤田東湖（1806～55）がいかに関与したかを考察する。

江戸時代末期、党争をどのように対処すべきかは、水戸徳川家における切実な課題として浮上した。当主・斉昭が展開する天保改革を支持する正志斎や東湖は、江戸初期から仕えてきた譜代家臣・門閥派と対立する最中であった。

そうした中、「小人」に対しては「寛容」と「排除」という態度を併存させるべきだと考える正志斎や東湖は、門閥派の徹底的な排除は不可能であると判断した。しかし、門閥派の最大の特徴である世襲と、党争の激化との関係について、両人は異なる議論の仕方を示した。

正志斎は、門閥派を尊重しながらも批判を加え、『周礼』に則った学校のもとで彼らを教育しようとした。「封建」構想の一環である学校論における門閥派の扱い方と、眼前にある党争の相手としてのそれとの接し方とは、直接結びつけられていない。

一方、東湖は封建社会における世襲を重視し、門閥派との党争は抑制すべきだと主張した。古代中国の「封建」や秦漢以降の「郡県」社会、さらには現今の政治体制との異同を思索する東湖は、「封建世界」である徳川日本における党争は危険であると考えた。争いは世代を跨ぎやすいからである。後漢以来発生し続けた中国のような党争を、東湖は明確に警戒した。これは、易学に基づき、宋代の党争史を抵抗なく受容した正志斎と対照的である。

上記の東湖の考え方は、長い射程を持つ。党争を生み出す地縁・学縁・血縁といった諸要素を念頭に置く際、世襲はどの程度の役割を果たしているのか。「郡県」社会でありながら、世襲の側面の強い両班が熾烈な党争を繰り広げた朝鮮朝は、いかに捉えるべきか。本発表では、こうした問題についても可能な限り検討してみたい。